近き者悦（よろこ）べば、遠き者来る

マイプライベートタイム

綾部（あやべ）市長（京都府）　山崎善也（やまざきぜんや）

地方創生の核心

表題は孔子の言葉ですが、まさに地方創生の核心を衝（つ）いた箴言（しんげん）といえます。まずは、住民自身がそれぞれの地域に誇りを持たない限り定住や交流の促進は覚束（おぼつか）なく、その土地を訪ねてきた人に対して、住民が自信を持って自分たちのまちの素晴らしさ（幸）を語ることから、地方創生は始まると思うからです。

私は〝Made in 綾部〟ながら18歳の春に故郷を離れ、政府系金融機関に30年奉職した後、縁あってUターンし市長に就任しました。長く故郷を離れていた私は市民にとって全くの無名候補で、初めての選挙は幼なじみや同級生などに支えられての戦いでした。政治の世界はもとより行政分野にも疎い人間の思い切った転身でありましたが、多くの皆さんに支えられ早くも4期目の半ばを迎えています。この間、コロナ禍や度重なる災害、有力立地企業の撤退や厳しい財政運営などいろいろと大変な時期もありましたが、一貫して表題への想いが揺らいだことはありません。

由良川を眼下に望む紫水ヶ丘公園。昭和27年、市民の浄財で平和塔を建立

コロナ禍は百害あって一利なしと言いますが、あえて副産物を挙げるとすれば、通信技術の進展によるウェブ社会の実験の場になったこと、そしてこの実証が都会の「密」を避け地方の「疎」への田園回帰を促したことです。われわれはこの田舎暮らし志向の潮流を、東京一極集中に歯止めをかけるチャンスとして捉え、それをしっかり受け止めるプラットホームを構築することが肝要と考えます。

綾部市の概要

本市は昭和25年に市制施行しました。その昔、市街地の真ん中を流れる由良川流域に桑畑が群生し、繭を原料に明治期には郡是製糸（現在のグンゼ）が創業。以後は繊維業を中心に隆盛をみましたが、今では新規の工業団地を中心にオムロンや京セラといった日本を代表するハイテク企業などが30数社立地する〝ものづくりのまち〟です。

市民ボランティアによる手作りの綾部バラ園

歴史的には足利尊氏の生誕の地とも伝えられていますが、戦前2度にわたり「大本（おおもと）事件」と称される弾圧を受けた宗教法人大本の発祥地でもあり、その縁で合気道もこの地で誕生しています。京阪神とのアクセスはJRや高速道を介し1時間圏内で、丹波と若狭を背景に山海の幸を享受しながら都会と田舎の暮らしを共に堪能できる環境は、長く住んでいると気付きにくいながら物心両面で恵まれた地域といえるでしょう。

しかしながら直面する課題も多く、その一つが人口減少、そして少子高齢化、さらには集落によっては過疎化の進展が著しいことです。これらの問題は本市に限ったこ

高速道路網や舞鶴港の整備によって物流環境に優れた工業団地

とではありませんが、活力が貧窮する中山間地の集落をいかに再生できるかが大きな課題となっています。人口減少対策として、国の地方創生に先んじて定住・交流促進を最優先施策として位置付け、条例化や専門の部署（定住交流部）新設を敢行すると同時に、「医・職・住」と「教育・情報発信」をキーワードとする五つの分野でさまざまな施策を展開しています。特に最近ではGX、DX、さらには子育て支援への重点的な予算配分も行うなど、持続的なまちづくりに取り組んでいます。

スローライフの薦め

「今が1番、しあわせ！」。よわいを重ねてそうつぶやく綾部市水源の里連絡協議会会長の言葉を忘れることはできません。15年前、このままでは村の存続さえ危ぶまれる中で、「故郷を消滅させてはならない！」と志ある村人が集落再生に踏み出し、それを行政も全面的に支援しました。限界集落を「水源の里」と命名し、定住促進、特産品開発、都市農村交流などに取り組み、マスコミにも注目される中、徐々に活動を広げていきました。勇気を持って踏み出した「小さな一歩」が「小さな成功」につながり、それが「小さな雇用」「小さな経済」として循環し始めています。高度経済成長時代に吹聴された皮相的な「都会神話」は徐々に崩壊しつつあります。時代の変遷とともに価値観が多様化する中で、田舎暮らしや「里山資本主義」が見直されるなど、幸せは画一的なものでなく一人一人異なるものであるという〝当たり前の多様性〟が受け入れられる時代になってきました。

先日（今年5月）、「スローライフ・フォーラム」が本市で開催されました。スローライフ学会学長である神野直彦先生の基調講演に始まり、増田寛也スローライフ学会会長（日本郵政社長）、小田切徳美さん（明治大学教授）、中村桂子さん（JT生命誌研究館名誉館長）などにパネリストとして参加していただきました。そこでは「半農半X」という新たなライフスタイルの提唱者である塩見直紀氏を生んだ本市が、まさにスローライフの聖地である――との評価も賜りました。

時代は確実に「多様性を尊重しながら、人間らしい生活をスローに楽しむ」方向に向かっています。私も朝夕、満員電車で通勤していた東京ライフはすっかり過去のものとなり、休日はサイクリングなど山や海の〝幸〟に興じています。こんなライフスタイルを当たり前のように実践しさらに極めることが、表題の孔子の言葉通り、多くの人が本市を訪れることにつながると信じてやみません。

住民3人の集落・古屋。名産「とち餅」に使うトチの実拾いや環境整備に集まったボランティア

毎年秋に開催される里山サイクリングに筆者も参加